View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Gunma University Academic Information Repository

Kitakanto Med J
2012；62：433～438

第10回日本泌尿器科学会群馬・栃木合同地方会演題抄録

（第61回日本泌尿器科学会群馬地方会演題抄録）

日　時：平成 24 年 6 月 17 日 (土) 13：00～
場　所：足利赤十字病院内　講堂
会　長：小林　幹男（伊勢崎市民病院）
事務局：柴田　康博（群馬大院・医・泌尿器科学）

〈セッションⅠ〉

座長：貝淵　俊光（済生会宇都宮病院）

臨床症例 1

1．膀胱癌に併発した IgG 4 関連後腹膜線維症の 1 例

宮澤　慶行　（群馬大院・医・泌尿器科学）
大竹　伸明，関原　哲夫　（日高病院）
井上　雅晴　（藤岡総合病院）

症例は 73 歳男性．2008 年に膵臓腫瘤を偶然発見され，膵臓がんの診断にて膵頭部十二指腸切除術を施行された．病理は IgG4 関連自己免疫性膵炎の診断であった．2011 年 7 月に無症候性肉眼的血尿を認め，当科初診となった．膀胱鏡にて右側壁に乳頭型有茎性膀胱腫瘍を認めた．術前の DIP にて上部尿路に異常所見なし．TURBT を施行，UC G3＞2 pT1 の診断であった．(2ndTUR にて癌なし，後療法なし) 術後に CT を施行したところ，両側の腎臓周囲に軽度造影される病変を認めた．採血で IgG，IgG4 高値を認め，IgG4 関連後腹膜線維症の診断とした．6ヶ月後の CT にて病変の増悪傾向を認めず，無加療にて膀胱癌と併せて経過観察を行っている．考察を加えこれを発表する．

2．気腫性腎盂腎炎で緊急手術を施行した 1 例

宮尾　武士，栗原　聡太，大木　一成
岡本　亘平，鈴木　光一，久保田　裕
松尾　康滋　（前橋赤十字病院）

症例は 76 歳女性，DM，HT にて近医通院中であった．平成 23 年 12 月 22 日食欲不振と左側腹部痛にて近医受診．GIF にて胃後壁の圧排を指摘され 12 月 24 日前医受診した．Xp・CT にて左腎気腫性変化と WBC 51,800/mm³・CRP 33mg/dl・BS 535mg/dl とを認め，同日当科紹介受診となった．造影 CT にて腎周囲気腫像を認め，気腫性腎盂腎炎と診断し入院した．入院後，ショックバイタルでもあり緊急腎摘施行した．術後 ICU 入室，厳格な血糖コントロールと抗生剤による治療を行った．経過良好にて第 3 病日 ICU 退室，第 29 病日軽快退院した．気腫性腎盂腎炎は致死率 20％前後で，保存的加療による奏効率は 30～60％程度であり，腎摘を行った場合 90％前後と報告されている．手術適応の可否で迷うが，本症例では腎実質がほとんどなく，またバイタルも安定しないため腎摘による感染コントロールは妥当だったと考えられた．

3．ウエスタンカテーテルの長期使用により尿道皮膚瘻を来した一例

西原　大策，水野　智弥，神原　常仁
増田　聡雅，幸　英夫，阿部　英行
別納　弘法，安士　正裕，深堀　能立
釜井　隆男　（獨協医科大学泌尿器科）
布施　美樹，内山智之，山西　友典
（獨協医科大学排泄機能センター）

(キーワード：尿道皮膚瘻) 症例は 40 歳男性．二分脊椎で出生，排尿障害のため 9 歳時からウエスタンカテーテルを使用し，37 歳時に固定していた振子部尿道に皮膚瘻が形成された．以降，尿道皮膚瘻からのカテーテル留置，交換していたが，尿路感染を繰り返しカテーテル挿入も困難となったため当院紹介となり，膀胱瘻造設と尿道閉鎖を施行した．二分脊椎による排尿障害は生涯に渡ってケアが必要である．不十分な排尿管理のため尿道皮膚瘻が形成された 1 例を経験したので報告する．